

人々の繋がりを強くする多義的实践

～札幌近郊の地域を事例に～

北星学園大学 文学部 心理・応用コミュニケーション学科

寺林暁良ゼミナール編

寺林暁良研究室調査報告書第6号(2022年度)より抜粋

第五章 震災復興を通じたコミュニティづくり

～安平町での取り組みを事例に～

藤巻舞羽・谷口佳奈・塚原和輝

一 研究の背景と目的

二〇一八（平成三〇）年九月六日三時七分に、胆振地方中東部を震源とするマグニチュード六・七の地震が発生し、安平町でも震度六強を観測した。安平町の全住家の約九四％が被害を受け、倉庫・物置・空き家などの被住家についても約七八％が被害を受けた。追分小学校、早来中学校が被災し、校舎の使用ができない状況となった。追分小学校は二〇一九（平成三一）年一月から使用できなくなるようになったものの、早来中学校については仮設校舎での学校生活を余儀なくされてしまった（安平町、二〇一九）。また、胆振東部地震での被害額は、約一七七億（早来中学校建設費を除く）であり、早来中学校仮設校舎の建設費は、約一億四、五〇〇億円であった（安平町、二〇二〇）。二〇一九（令和元）年四月には「道の駅あびらDRISTーション」が開業した。また、二〇二二年二月一七日、日本で初めて「日本型子供にやさしいまちモデル」実践自治体として承認され、二〇二三（令和五）年一

月には、公立の義務教育学校である「安平町立早来学園」が開校する。安平町は、胆振東部地震によって甚大な被害をもたらされたにもかかわらず、積極的に震災復興に取り組んでいるといえるだろう。

二〇一九（令和元）年四月には「道の駅あびらDS1ステーション」では、役場提供資料より地場産品を生かしたベーカリーコーナーやテイクアウトコーナー、近隣市長を含めた特産品の販売コーナー、地元農産物などを販売する直売所が整備されており、二〇二二（令和四）年五月一九日には来場者が二〇〇万人を達成したと記載されている。

また、安平町には四つのキャンプ場があり、町内の飲食店のPOPとチラシを制作し町外の利用者に安平町の飲食店を利用してもらうような取り組みをおこなったり、ウェブ予約システムの導入をしたりなどさまざまな取り組みをおこなっている。

このように安平町では、震災後さまざまなまちづくりをおこなっている。本章では、安平町の地域活性化の役割を担う拠点や取り組みを把握し、それらを活かしたまちづくりについて検討する。また、安平町をより活性化させるためのコミュニティのあり方について考察する。

二 研究の方法

安平町は、北海道の南西部に位置し、北は由仁町、東は厚真町、南は苫小牧市、西は千歳市に接している。札幌市から直線で約五〇キロメートル、新千歳空港からは約一四キロメートルの位置にあり、交通の利便性に恵まれた地域である。二〇二二（令和四）年一二月末日時点での安平町

の人口は七、三一九人、世帯数は三、九八四戸である。安平町は、一九五二（昭和二七）年に追分町・早来町の前身である安平村から分村した。二〇〇六（平成一八）年に、早来町と追分町が新設合併し、現在の安平町となった（安平町a）。

二〇二二（令和四）年八月三十一日に、ミニフィールドワークとして安平町を訪問し、コミュニティスペース「ENTRANCE」や「道の駅あびらDS1ステーション」を訪問した。「ENTRANCE」に訪問した際に、あびら教育プランやキャンプ場、道の駅に関する話を聞いた。また、地域おこし協力隊インターンについての話も伺った。そこで、「地域おこし協力隊インターン」「道の駅」「キャンプ場」の三つのテーマで安平町でのコミュニティについて検討し、調査することが決定した。

二〇二二（令和四）年一〇月二六日から十一月二八日までの約一ヶ月間、谷口が地域おこし協力隊インターンに参加し、参与観察をおこなった。総務省ホームページによると、地域おこし協力隊とは、地域外から過疎地域等の条件不利地域に住民票を異動し、地域ブランドや地場産業品の開発・販売・PR等の地域おこし支援や、農林水産業への従事、住民支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取組である。また、地域おこし協力隊インターンは、地域おこし協力隊と同様の地域協力活動に二週間から三ヶ月に従事し、地域おこし協力隊への具体的なイメージを持ちアピールおよび検討することが目的である（総務省ホームページ）。

また、二〇二二（令和四）年一月一六日に、安平町に足を運び、ヒアリング調査をおこなった。安平町役場総合庁舎にて政策推進課・商工観光課・建設課の各課担当者に話を聞いた。その後、はやきた子ども園にてアビースポーツクラブの鳥實裕弥さんから話を聞き、「ENTRANCE」で安平町のまちづくりを支援する会社である株式会社FoundingBase 林賢司さんに話を聞いた。最後に、

「道の駅あびらDS1ステーション」に行つて観光協会の担当者からも話を聞いた。

III ENTRANCE のよるまちづくり

(1) ENTRANCE の立ち上げ

二〇一八年九月六日に発生した北海道胆振東部地震によつて、安平町は甚大な被害を受けた。しかし、震災後二日で「安平町災害ボランティアセンター」が立ち上がり、延べ四、〇〇〇人以上のボランティアの参加があつた。ボランティアの参加によつて、災害復旧はハイペースで進めることができ、二ヶ月程度で落ち着きを見せたが、町から離れた住民がいたり、商店が空き地となつたりとまちの活力が時間と共に失われていた。そこで、町の活力を取り戻し、町の復興を推進することを目的とした安平町復興ボランティアセンターが設立された。イベント運営や無償塾の運営を行なつた。その後、復興の未来をつくる拠点として、「ENTRANCE」が立ち上げられた(ENTRANCE ホームページ)。

(1) FoundingBase と ENTRANCE の関係性

株式会社 FoundingBase は、「自由」をアップデートするという目的のもと、地方を軸に事業展開している地方共創ベンチャー企業である (Foundingbase ホームページ)。安平町と FoundingBase は包括協定を結んでいる。また代表取締役 CEO である林賢司さんは、二〇〇八年十一月一日に

安平町地域おこし企業人に着任し、二〇二一年一月一日からは安平町地方創生アドバイザーとして安平町のまちづくりに関わっている。胆振東部地震によって安平町地域おこし企業人の着任日を待つことなく、ボランティアとして復旧・復興に取り組み、企業人業務としても復興活動に関わることを安平町に認められさまざまな活動をおこなってきた。その中で「一般社団法人安平町復興ボランティアセンター」を立ち上げ、副センター長として復興に向けた活動をおこなった(FoundingBase、二〇二二)。復興ボランティアセンターの立ち上げを皮切りに、FoundingBase によって、コミュニティスペース「ENTRANCE」の運営をこっている。

(三) あびら教育プランとは

安平町では、「遊育」「あびらぼ」「ワクワク研究所」「ABIRA Talks」の四つの事業を通して、様々な「学び」から「挑戦」に繋げる独自の教育手法「あびら教育プラン」に取り組んでいる。子どもたちが自分で未来を構想し、自分を信じて行動できる力をつけることを目的としている(安平町b)。

安平町では、町の第一優先政策分野に「子育て・教育」を掲げ、「日本一の公教育があるまち」を目指している。安平町は、学校教育と社会教育の両軸で官民が連携して教育を支えていく必要があると考え、役場を中心に学校や認定子ども園、そしてFoundingBaseのような一般企業がそれぞれの役割で学校教育・社会教育の取り組みを実施し、また相互に連携し合う仕組みを整えてきた。FoundingBase では二〇一九年四月より町独自の社会教育事業「あびら教育プラン」の運営をおこ

なっている。あびら教育プランでは「豊かに生きるために挑戦する人」を育むことを目指し事業をおこなっている（FoundingBase、二〇二二）。

安平町地域おこし協力隊インターンでは、安平町の地域活動や生活を具体的な体験として、あびら教育プランのサポートや記事作成、イベントの企画などあびら教育プランの業務を中心に行う（安平町、二〇二二）。

安平町地域おこし協力隊インターンは、ガンケ山や早来学園、「ENTRANCE」など用途や目的に応じて、さまざまな場所で活動をおこなっている。前述したコミュニティスペースの「ENTRANCE」では、主に「遊育」の一環である「ぷれいば」や追分中部部の「あびらぼ」、「ワクワク研究所」のプロジェクト、「ABIRA Talks」の会場、教育プランのイベントの会場として使用されていた。

（四）安平町地域おこし協力隊インターンを通して

本節では、地域おこし協力隊インターンが安平町でのコミュニティにどのような意味を持っているのか、および地域おこし協力隊インターンを通して安平町ではどのようなコミュニティづくり実践しているのかの二点を考察し、述べていく。

まず、安平町で地域おこし協力隊のインターンを通して外部の人材が町と関わりを持つことが、安平町にとってどのような意義を持つか考察する。地域おこし協力隊インターンは、新たな安平町での関係人口の創出につながっているだろう。今までインターンに参加した人は、安平町にルー

ツを持たない人であった。しかし、このインターンに参加し安平町に滞在することで、町との関わりが生まれる。そして、町に対して興味や愛着が生まれたり、アンテナが立ったりすることを応援する。そうすることで、安平町に定住していなくても安平町がよりよいまちになることを応援したり、まちづくりに参加したりする担い手となるだろう。実際、今までインターンに参加した人たちが、インターン終了後の教育プランのイベントにオンラインで参加している様子を見た。また、私もインターンが終わった後も積極的にまちと関わりを持ち続けたいと考えている。そのため、二〇二二年一月一八日に開催された「ABIRA Talks」にオンラインで参加した。

次に安平町でのコミュニティづくりの実践について述べる。安平町では、さまざまなコミュニティを通して、自分のワクワクに挑戦できる町であるとインターンを通して考えた。

あびら教育プランでは、子どもだけではなく大人まで、挑戦できるコミュニティであると考えられる。遊育やあびらほ、ワクワク研究所では、主に子どもの学びや挑戦がメインの対象となっている。しかし、大人にも関わりしろがある。遊育やあびらほでは、子どもの興味のあるを引き出し、色々な世界を提供することができる。色々な遊びや知識を通して、子どもたちが柔軟に創造することによって、新たな価値観や考えを知ることができる。また、ワクワク研究所では子どもが自分のワクワクを追求する。その中で、大人はサポートをする。サポートをしていく中で、自分の知らない世界を知ることができる。したがって、あびら教育プランは子どもも大人も学び合える場所であるだろう。「ABIRA Talks」は、大人も参加することができる。自分のワクワクや挑戦のため、町民にクラウドファンディングをするイベントである。自分の目標を町民にプレゼンをして、支援を募る。クラウドファンディングの成功に向けて運営側のサポートがあるため、挑戦者の

目標が明確化することができると考える。

また、「Fanfare あびら起業カレッジ」では、安平町で自分のワクワクに挑戦することができ、安平町では事業を創出することができることで町に新たな魅力が生まれると考える。「Fanfare あびら起業カレッジ」とは、二〇二一年度に始まった安平町を舞台に、新たな暮らしや働き方、事業創出といった価値を生み出す、チャレンジをする仲間を、発掘・育成・選考するプログラムである（Fanfare あびら起業カレッジ運営事務局ホームページ）。実際に、「Fanfare あびら起業カレッジ」を通して地域おこし協力隊に採択された早来地区で「あびらカフェ」運営をしている浅野浩司さんや追分地区でゲストハウスを開業した青木良佑（ROY）さんとの出会いを通して、自分のワクワクを通じた挑戦によって、安平町をより盛り上げようという思いやそれを町が一丸となってサポートすることによってその思いを実現することができていると感じられた。

このように、自治体によるさまざまな取り組みによって安平町に関わる人がワクワクと向き合い、思いを実現することができると考える。

四 道の駅によるまちづくり

（一）道の駅あびらDS1ステーションについて

次に、安平町にある道の駅、「道の駅あびらDS1ステーション」がコミュニティにおいてどのような役割をしているのかについて考察する。この節では、安平町役場でのヒアリング結果や、当

日頂いた資料の流れに沿って、その資料を中心に引用する形で安平町道の駅について説明する。初めに、「道の駅あびらDS1ステーション」の概要を述べる。「道の駅あびらDS1ステーション」は、二〇一九（平成三二）年三月一九日付けで道の駅に登録された、国道二三四号では初めての「道の駅」である（室蘭開発建設部広報官、二〇一九）。二〇二二（令和四）年五月一九日には来場者が二〇〇万人を達成した。「道の駅あびらDS1ステーション」は、二〇一四（平成二六）年度には基本計画を立て、二〇一五（平成二七）年度には工事設計書に落とす実施計画、二〇一八（平成二八）年度には町民への説明があり、二〇一七（平成二九）、二〇一八（平成三〇）年度に工事という流れで建てられた。

整備目的は三つあり、（一）分散する地域資源（人・もの・文化等）を集結し、町の価値を高めること、（二）都市と農村との往来やつながりを促し、交流人口を拡大すること、（三）町の認知度を向上させることである。

次に、コンセプトは三つあり、①施設コンセプト…まちの文化と歴史を後世に伝える過去と未来をつなぐステーション、②運営コンセプト…自由な交流や経済活動が広がる、地域活性のステーション、③機能コンセプト…回遊交流の拠点となる、地域情報発信ステーションである。

また、施設機能は四つあり、①食の魅力発信ステーション機能（特産品PR強化と販路拡大）、②交流促進ステーション機能（町民と来訪者の交流促進）、③観光情報ステーション機能（観光ルートや施設情報を発信）、④文化歴史ステーション機能（SLや歴史文化の理解促進）である。

「道の駅あびらDS1ステーション」は食と鉄道を売りとしており、まず食は、地場産品を活用したテイクアウトコーナー、ベーカリーコーナー、近隣市町を含めた特産品販売コーナー、地元農産物等を販売する直売所が整備されている。次に鉄道は、最高の状態で保存されている「DS1-

三二〇」が展示されており、施設は昭和中期のレトロ駅舎をイメージしたスペースを構築し、鉄道に関連する「事柄・文化・歴史」が表現されている。同時に、休憩施設としても安らぎと癒しを得られるように落ち着いた色合いと佇まいで構成されている。「DS1ー三二〇」は元国鉄マンが整備しており、野外線路も整備されている。また、二〇一七年に保有写真をデジタル化しており、施設内の展示として活用されている。

他にも、道の駅周辺に柏が丘公園（ポッポランド）があり、こちらは二〇二一（令和三年）四月二九日にオープンしている。この道の駅はターゲットであるファミリー層の集客と来訪者の滞在をねらいに整備されたもので、子ども向けの遊具や、ミニSLが走行するSLサークルがあり、五月一〇月に月二回、石炭を焚いて水蒸気で走行するミニSLの乗車体験がある。

（二）道の駅あびるDS1ステーションへの期待と来場者数

次に、この道の駅が必要になった経緯である。安平町には人口減少と高齢化という問題があり、人口減少は合併から一〇年で人口は約一、〇〇〇人の減少、高齢化率は二〇一〇年の国勢調査で初めて三〇%を超え、二〇一六年三月末では三四%まで上昇した。なお、国政調査によると、二〇二〇年時点では約三七%である。さらに地域の課題として商業機能、雇用、企業誘致、観光分野に関しては「重要度が高いが満足度が低い」、商工農林業、地域ボランティア活動、コミュニティ活動に関しては「後継者・担い手の不足」があり、このような現状で町ができる「地域活性化策」を考えた際、町外者の誘客に加えて町民が活躍でき、地域振興を具体的に進めることに最適の事業が「道の駅」であった。

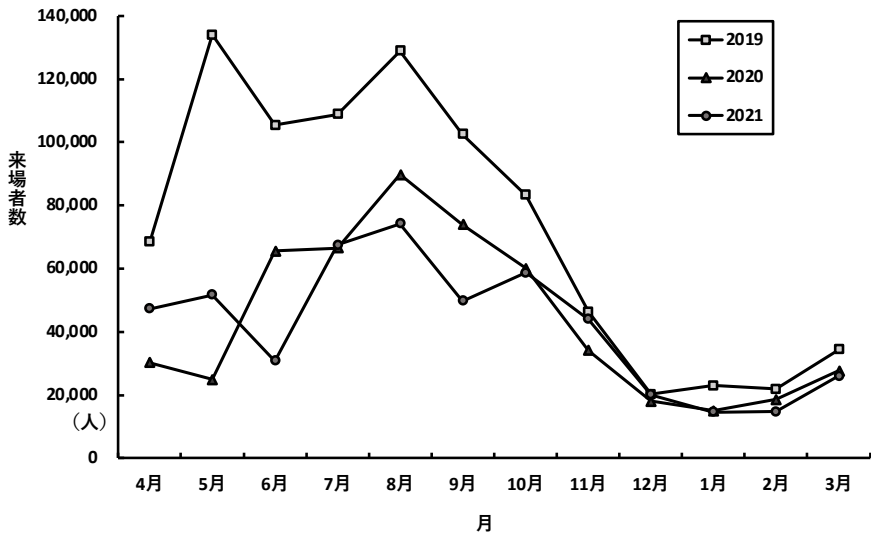


図 5-1 年度・月別の「道の駅あびらD51ステーション」の来場者数

出典：安平町役場提供資料より作成

道の駅の来場者数についても確認してきたい。道の駅がある国道二三四号線は苫小牧港を利用する大型車両が多く通行する産業道路と言われる道路であり、道の駅建設前に行った交通量調査から道の駅の立寄り想定数が三二万人であると算出された。しかし、①道の駅が胆振東部地震からの復興シンボルとして位置づけられていたこと、②オープン直後に一〇連休があったこと、③SLをはじめとした鉄道車両が六月に運搬されたことなどが影響し、開業初年度は想定数を超える八七万人の来場者に恵まれた。

その後の二年間は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のための行動制限や臨時休館などの影響も受けたが、ゴールデンウィークやお盆時期の繁忙期以外に、道の駅の賑わい創出に向けたイベントを数多く実施すること、来場者は五〇万人前後になっている。来場者数の推移を見ると、二〇一九年度

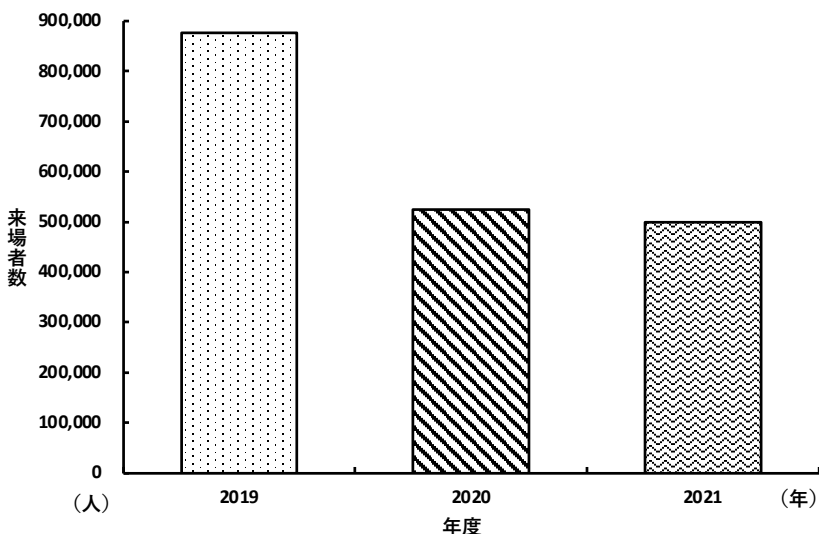


図 5-2 年度別の「道の駅あびらD51ステーション」の来場者数

出典：安平町役場提供資料より作成

の五月は開業して初のゴールデンウィーク、二〇二〇年度の五、六月はコロナ禍であったことを鑑みた上で、六月から八月にかけて来場者数が多く、八月から二月までは来場者数が急速に減り、一二月から三月にかけて緩やかに来場者数が増えているというサイクルであると考えることができる（図五―一、図五―二）。

（二）道の駅あびらD51ステーションと 地域

道の駅と地域の関係について述べる。道の駅の建設には、安平町役場でのヒアリングによれば反対意見があったという。その反対意見というのは、公共施設は長い間建っているため、黒字になる保証があるのか、また赤字になった場合子供たちの世代などの負担になるのでは、トラックが多い国道二三四号線でレジャー客を呼び込めるだけ

の魅力を出すことができるのか、建てるのであれば魅力を高め採算がとれるような施設でなければならぬというものである。

安平町役場は、道の駅は行政主導で建設の案が上がったため、町民説明を丁寧に行ったという。また、役場提供資料によると、道の駅建設に前向きな人々を募り、二〇一五（平成二七）年に「道の駅建設検討部会」を立ち上げ、「デザイン部会」「販売部会」「農直部会」「鉄道部会」で住民からの意見を収集して実施設計に反映させた。以上のことから、町民への説明や、町民に計画に参加してもらうなど、道の駅と町民の距離が近いことが安平町の道の駅の特徴であり、また、道の駅は安平町の活性化の役割を担っていることが分かる。

（四）道の駅あびらDSIステーションとイベント

道の駅とイベントについて述べる。先ほど冬の集客数が減る傾向にあると述べたが、それに関して安平町役場は、家族層をメインとして、イベントや企画に頼る必要があると述べていた。

調査日には「恐竜ワールドむかわ展」が開催されており、全身復元骨格が展示されている。これは、「道の駅あびらDSIステーション」と「ぬくもりの湯」の二つの会場を巡ってスタンプを集めることでミニ恐竜レプリカをプレゼントするという企画であった（道の駅あびらDSIステーション、二〇二二a）。この企画は、安平町にはSLという文化財があり、むかわ町には恐竜の化石があるため、これらを使ってお互いコラボし、お互いの集客を図るという意図があるという。また、安平町役場は、穂別やむかわは距離の関係で行って一日で終わってしまうが、安平町は他の場所にも寄ってから帰ることができるドライブコースになると来場者に聞いたと述べていた。

また、「鉄道模型フェスEあびらDS1ステーション」という、新型コロナウイルスの影響で中止にはなってしまったイベント（道の駅あびらDS1ステーション、二〇二二b）の話も聞いたが、安平町役場によると、特急列車を道の駅に持ってきた際の縁で、鉄道団体や模型・写真マニアなどの様々な愛好家とのネットワークで模型を走らせ来場者を呼ぶという形だったという。安平町役場は、このようなイベントを運営しているのは観光協会のスタッフであり、来るたびに違うことをやっているというイメージを道の駅に持つてもらわないとリピーターはつかないという考えのもと、シーズンごとに来場者を飽きさせない工夫をし、なおかつコラボ先との縁も観光協会が繋いでいるという。

以上のことから、観光協会がコラボ先と縁を繋ぎ、安平町の持っている特徴を活かしてコラボやイベントをすることで、集客をし、そこからつながりのきっかけが発生することが分かる。

（五）道の駅あびらDS1ステーションとつながり

最後に、道の駅とつながりの要素について述べる。つながりの要素は二つある。一つ目は行政が町民に積極的に関わっていることである。これは、町民が道の駅に関わるきっかけを作り出していると言える。二つ目は、イベントの開催をコラボ形式で行っていることである。これにより、イベントで安平町のことを知ってもらうきっかけや、他地域との関わりを作るきっかけが得られる。

五 キャンプ場によるまちづくり

一般的に、地域におけるキャンプ場は、一時的に着て帰るといふ交流人口の増加にとどまるケースが多い。しかし、安平町では町役場と道の駅の三つの連携によって、交流人口を関係人口にしようとしている。そこで、安平町ではキャンプ場の旅行者を関係人口にするためにどのような取り組みが行われているのかを考える。

ここでは安平町役場に調査に行った際のお話と安平町にある四つのキャンプ場のおおまかな概要について述べる。まず、ときわキャンプ場と鹿公園キャンプ場は町営で運営しており、弥生パークキャンプ場と追分ファミリーキャンプ場は民間での運営になっている。町営が運営しているときわキャンプ場は早来地区にあり、鹿公園キャンプ場、民間での運営である弥生パークキャンプ場と追分ファミリーキャンプ場は追分地区に位置する(図五―三)。

ここからは安平町役場に調査に行った際に話を聞くことができた町営で運営しているときわキャンプ場と鹿公園キャンプ場の二つのキャンプ場で行っている実施事業などを述べていく(図五―四)。安平町は札幌都心から約一時間、新千歳空港から約三〇分、苫小牧から約四〇分という立地に優れていることもありキャンプ場利用者の八〇九割ほどが札幌圏内の人の割合である。ときわキャンプ場の概要としては、バンガローやツリーハウス、フリーサイト、BBQコーナー、手ぶらキャンプが楽しめるキャンプ場となっている。一方で鹿公園キャンプ場では、区画サイトやフリーサイト、BBQコーナー、手ぶらキャンプが楽しめるキャンプ場となっている。全体的な



図 5-3 安平町のキャンプ場の位置

出典：安平町役場提供資料より引用

入り込み客数では胆振東部地震直後や新型コロナウイルスでの休場による客数の落ち込みは見られるが、過去一〇年間を見比べるとどちらのキャンプ場も四倍近く利用者が増えている。

二つのキャンプ場では、二〇二〇（令和二）年以降に料金改定やゴミの回収、手ぶらキャンプ、チェックインやチェックアウト時間の統一変更など大幅な運営の仕組み変更を行っている。運営の仕組み変更を行った背景に、利用者の声を多く反映していくためにアンケート調査を行ったという。二〇二〇（令和二）年と二〇二二（令和四）年にそれ

	H30	R元	R2	R3	R4
ときわキャンプ場	<ul style="list-style-type: none"> ・旧料金 <p style="text-align: center;">胆振東部地震</p>	<p style="text-align: center;">災害復旧工事</p> <p style="text-align: center;">(1年間休場)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・料金改定① ・ごみ回収 ・手ぶらキャンプ導入 ・チェックイン チェックアウト 時間変更 	<ul style="list-style-type: none"> ・予約システム導入 	<ul style="list-style-type: none"> ・料金改定②
鹿公園キャンプ場	<ul style="list-style-type: none"> ・旧料金 <p style="text-align: center;">9月6日以降 休場</p>	<p style="text-align: center;">通常運営</p>	<p style="text-align: center;">新型コロナウイルス蔓延</p> <p style="text-align: center;"><small>※緊急事態宣言による休業及び組織制限</small></p> <ul style="list-style-type: none"> ・料金改定① ・ごみ回収 ・手ぶらキャンプ導入 ・チェックイン チェックアウト 時間変更 	<ul style="list-style-type: none"> ・予約システム導入 ・鹿公園トイレ増設 炊事場建設 	<ul style="list-style-type: none"> ・料金改定② ・区画サイト導入

図 5-4 ときわ・鹿公園キャンプ場事業年表

出典：安平町役場提供資料より引用

ぞれ料金改定を行っているが施設の修繕や改修、新築などサービス向上にもつながるため料金が上がっている。

具体的な料金改定後のサービス向上につながる実施内容としては鹿公園のトイレ増設や炊事場工事などが挙げられる。またアンケートで要望の多かった内容からゴミの回収を行い、道具を持っていないキャンプ初心者層に向けて手ぶらキャンププランを作っているというのが二〇二〇（令和二年）から行っている事業内容となる。

チェックアウトやチェックインの時間の統一変更の経緯としては、以前のチェックイン一五時ではテントを立ててからだと楽しむ時間がないということで変更後はチェックイン時間を一三時に変更している。チェックイン時間を一三時に設定した経緯についても町内の飲食店を利用した後にキャンプ場を利用してほしいという役場の意図も込められている。

二〇二一（令和三年）からは以前の現地に来て受付をするという形を変更し、ウェブサイトでの予約シ

システムを導入し、チェックイン時の混雑を防ぐという対策をとっている。混雑を防ぐという意味では鹿公園キャンプ場では混雑時の隣との間隔が狭いなどを解消するために区画サイトの導入を二〇二二（令和四）年から予約システムに連動して行なっている事業内容になる。他には今年からSNSの投稿やアウトドアイベントを行いながら集客に向けてさまざまに取り組みを行っている。

また安平町では「遊食」というイベントを通じて道の駅とキャンプ場、町内の飲食店がつながり町外の利用者に安平町の飲食店を利用してもらうためにPOPを制作し道の駅とキャンプ場の両方にPOPと持ち帰り可能なチラシを設置するという取り組みも行っている。そのようなイベントを行うことで、八〇九割を占める札幌圏内の利用者が安平町のことを知るきっかけづくりになる。具体的な数値は取っていないというが、商店街の店主からはチラシや広告を見てくる人が増えたという声を聞いたという。このようなイベントを道の駅と連携して行うことで、道の駅だけでなく、役場や商店街との連携により地域住民が主体となつて地域を盛り上げようとすることで、さらなるキャンプ場の価値の向上につながるのではないかと考える。

六 まとめ

本章では、安平町の地域活性化の役割を担う拠点として、「ENTRANCE」、「道の駅あびらD51ステーション」、安平町のキャンプ場を取り上げ、それらを活かしたまちづくりについて検討した。そして、先述したように、「ENTRANCE」であればインターン生、道の駅であれば

食と鉄道をメインとした道の駅デザインやコラボを含めたイベント開催、キャンプ場であれば手ぶらでもキャンプができる仕組みといったように、それぞれの拠点を活かして関係人口の創出に役立つことがわかった。

安平町をより活性化させるためのコミュニティの在り方について、自治体では子どもと大人どちらも学んだり、挑戦したりといったような、安平町の人々が自己実現をすることができる取り組みを実践し、道の駅では積極的な行政と町民の関わりやコラボで他地域との関わりを大切にし、キャンプ場ではチェックイン時間を変えたりPOPを制作したりすることで町内の飲食店利用を促している。このことから、安平町をより活性化するコミュニティの在り方とは、町内から活性化する方法と町外含めて活性化する方法の両方を揃えていることであると考えられる。つまり、町民が自己実現をすることができたり、関係人口が一か所に集中するのではなく町内の様々な場所に関係人口が増えたりすることで、安平町のコミュニティは活性化していくのであろうと考えられる。

引用文献

- 安平町 a 「安平町の紹介」 (<https://www.town.abirai.g.jp/chikishinko/kggyoyuchi/44> 二〇一三年一月二四日閲覧)。
安平町 b 「あびら教育プラン」 (<https://abira-edu-plan.jp> 二〇一三年一月二四日閲覧)。
安平町 (二〇一九) 「安平町復興まちづくり計画」 (<https://www.town.abirai.g.jp/weebopen/parts/1191/keikaku.pdf> 二〇一三年一

月二四日閲覧)。

安平町 (110110)「平成30年北海道胆振東部地震被害概要 要約最新版(安平町)」(<https://www.town.abira.lg.jp/webopen/info/16667/>)。 110110年1月24日閲覧。

安平町 (110111)「安平町地域おこし協力隊インターン募集要項」(<https://www.town.abira.lg.jp/webopen/info/16667/youko.pdf>)。 110110年1月22日閲覧。

総務省「地域おこし協力隊とは。」(https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyousei08_03000066.html)。 110110年1月24日閲覧。

道の駅あびらD51ステーション(110111)「恐竜ワールドむかわ展『あびら恐竜スタンプラリー』開催中」(<https://d51-station.com/info/4913.html>)。 110110年1月22日閲覧。

道の駅あびらD51ステーション(110111)「『鉄道模型フェス』あびらD51ステーション』の中止について」(<https://d51-station.com/info/4925.html>)。 110110年1月22日閲覧。

室蘭開発建設部広報官(110119)「胆振管内に新たな『道の駅』が誕生します！～安平町の震災復興のシンボル・地域創成拠点としての役割を果たします～」(<https://www.hkdmtr.go.jp/mr/release/c5b1ee00000b8ci-art/c5b1ee00000e6cjp.pdf>)。 110110年1月22日閲覧。

ENTRANCE「HISTORY 震災から復旧・復興、そして未来へ。エントランスのあゆみ」(<https://entrance-abira.com/history>)。 110110年1月24日閲覧。

Fanfare「あびら起業カレッジ運営事務局」(<https://fanfareabiraentrepreneurshipprogram.com>)。 110110年1月24日閲覧。

FoundingBase(110110)「Corporate Profile」(<https://foundingbase.jp/n/n55b67e8ca907>)。 110110年1月24日閲覧。

FoundingBase(110111)「安平町地域おこし企業人の任期満了と包括協定の締結」(<https://foundingbase.jp/n/n/befefc783b8>)。 110110年1月22日閲覧。

FoundingBase(110111)「ユニセフの子どもやさしい町づくりを進める自治体として、安平町が日本で初めて認定を受けました」(https://foundingbase.jp/n/n27d119020068?magazine_key=md4836bd5d8d#sb1A)。 110110年1月24日閲覧。

執筆分担

藤巻舞羽…四節、六節

谷口佳奈…一節、二節、三節

塚原和輝…五節

谷口佳奈 安平町地域おこし協力隊インターンで、さまざまな活動や人との出会いことで自分の見ている世界が今までよりも広がりました！

また、安平町での取り組みや人の温かさなど安平町での滞在を通して、安平町の魅力を実感し、これからも安平町に関わり続けることができたらなあと思っています！素敵な経験をするのができました。ありがとうございます！

塚原和輝 ゼミの調査では安平町、卒業研究の調査では鷹栖町を調査し、それぞれの町で見えてきた地域での課題や地域活性の方法の違いや面白さについて知ることができました。実際に現地へ足を運び地域の方とコミュニケーションをとることで地域住民の声というものもたくさん聞くことができ文献調査だけでは得ることのできない学びもたくさんありました。調査で得たことを活かして卒業研究をより良いものにしていきたいと思えます。

藤巻舞羽 ゼミでの調査は、日常生活では聞くことのできないお話を多く聞くことができたのが印象的だった。心理学を専攻していた時は数字から事柄を読み取っていたが、社会学ではお話から手法も使って事柄を読み取るというのが面白く感じた。また、余市町と安平町という二つの事柄を同時に担当することは自分のキャパシティに対して想像していたよりも大きく、苦労したが、その卒業研究に活かせるような情報を手に入れたり、考察をすることができたりしたのではないかと考えられる。卒業研究では、ゼミ論で研究したことを活用したいと考えている。